

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：10103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370455

研究課題名(和文)ポリネシア諸語における様々な小辞の機能・用法に見られる差異について

研究課題名(英文) Semantic and functional differences observed in various particles in Polynesian languages.

研究代表者

塩谷 亨 (SHIONOYA, Toru)

室蘭工業大学・工学研究科・教授

研究者番号：10281867

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：ポリネシア諸語の機能語は名詞的小辞、動詞的小辞、一般的小辞の三つのタイプに分類される。この研究では、いろいろな小辞について、別のポリネシア諸語の同系小辞と対照をすることにより、どのような意味的・機能的差異が見られるのか研究した。観察された差異は二種類であった。一つは、ある小辞の意味や機能が徐々に推移した結果として生じたと思われる差異、もう一つは、二つの小辞が意味的・機能的に一つ統合したことにより生じたと思われる差異である。後者は更に、文中の同じ位置に起こる二つの小辞が統合し多義的な小辞となる場合、文中の隣接する位置に起こる二つの小辞が統合し多機能的な小辞となる場合の二つに分かれる。

研究成果の概要(英文)：Functional words in Polynesian languages can be classified into three types of particles, i.e. nominal particles, verbal particles and general particles. In this study, a number of particles were compared with their cognates in other Polynesian languages to examine semantic/functional difference observed between them. There are two kinds of differences observed in the data. One is the difference caused by a gradual shift of the meaning/function of a particle and the other is the one caused by semantic/functional integration of two particles into one. Moreover, the latter can be divided into two cases. When two particles which can occur in the same position in a sentence are integrated, it results in a multiple meaning particle. On the other hand, when two particles which can occur in the position adjacent to each other in a sentence are integrated, it results in a multiple function particle.

研究分野：言語学

キーワード：ポリネシア諸語 対照研究 小辞

1. 研究開始当初の背景

(1) 他の多くの言語と同様、ポリネシア諸語の語類も一般に、名詞や動詞のような内容語と、限られた数の機能語に大別される。ポリネシア諸語の機能語(前節語又は後接語とみなされる)は、文法的機能を担う名詞的小辞と動詞的小辞の二つ、及び、副詞的機能を担う一般的小辞の計三つに分類することができる。名詞的小辞は前置詞や冠詞など名詞を特徴づけるもので、動詞的小辞は時制やアスペクトの指標など動詞を特徴づけるものである。副詞的機能を担う一般的小辞は名詞とも動詞とも共起するものである。このような分類はサモア語以外の他のポリネシア諸語にも広く通用するものである。

(2) ポリネシア諸語は起源を一つにする同系言語グループであるが、現在でも、お互いに語彙的に類似性が高い。名詞や動詞についてはもちろんであるが、機能語についてもその多くは、形の上でも、機能・用法の上でも対応しているものは多い。例えば、動詞的小辞の一つ完了アスペクトの指標は多くの言語で形が対応するものがあり、その機能・用法も酷似している。一方で、同系で形の上では対応しているものの、その用法が大きく異なっている場合もある。例えば、名詞的小辞の一つである不定冠詞については、いろいろな言語の間で形の上では対応しているが、その機能については、例えば、サモア語では不定冠詞が前置詞と共起できるのに対して、タヒチ語とハワイ語では不定冠詞が前置詞と共起できない等、大きく異なっている。

(3) このようなことから、ポリネシア諸語間で、形の上で対応している機能語について、機能上・用法上、大きな差異が生じているものはどのような語であり、その差異とはどのようなものであるのか、また、逆に、機能上・用法上ほとんど差が見られないものとはどのような語なのか、そこに何らかの傾向性はないのか、明らかにしたいと考えるに至った。

2. 研究の目的

(1) ポリネシア諸語についての広範囲のデータを集め、それに基づき、それぞれの言語がどのような名詞的小辞を持っているかその形、機能・用法をまとめ、その中で形の上で対応しているものの機能・用法を比較し、差異があるかないか、差異がある場合にはそれがどのような差異なのか明らかにする。

(2) 上述(1)と同様のことを動詞的小辞について行う。

(3) 上述(1)、(2)と同様のことを一般的小辞について行う。

(4) 上述の三つの結果を総合して、どのような名詞的小辞、動詞的小辞、一般的小辞の機

能・用法に差異がみられるのか、また、その差異とはどのようなものなのか、傾向性を分析しまとめる。

3. 研究の方法

(1) これまでに未収集の先行研究データを補充し拡充するため、国内図書館に所蔵のポリネシア諸語関連文献によるデータ収集を行う。収集先としては、太平洋地域の辞書を多数所蔵する東京外国語大学図書館とし、主に、ポリネシア諸言語の記述文法及び辞書等から、名詞的小辞、動詞的小辞、一般的小辞に関連する情報及びそれらに関連する情報を収集する。

(2) 日本国内で入手可能な文献には限りがあるため、海外でも資料収集を行う。渡航先は、多くのポリネシア言語関連資料が集中しているハワイと、他では入手が困難な仏領ポリネシア領内の諸言語関連文献が入手可能なタヒチとし、ハワイ大学図書館、Maison de la culture 図書館、Native Books、KLIMA 等の専門書取扱い書店等で資料収集を行う。主に、ポリネシア諸言語の記述文法及び辞書等から、名詞的小辞、動詞的小辞、一般的小辞に関連する情報及びそれらに関連する情報を収集するが、実際の使用例に基づく分析のための言語データも、サモア語、タヒチ語、ハワイ語を中心として、収集する。

(3) これまでの科研費等による調査で得られた先行研究データ及び上記(1)と(2)で補充したデータから、名詞的小辞、動詞的小辞、一般的小辞に関連するものを集め、それぞれの名詞的小辞について、それぞれの形式、機能・用法について整理する。

(4) 上記(3)に基づき、それぞれの言語が持っている名詞的小辞のうち、複数の言語間で同起源と認められるものの中で、機能上・用法上の差異が見られるものを拾い出す。特に、ハワイ語、サモア語、タヒチ語については、収集した言語データから名詞的小辞の用例データを抽出し、それぞれの機能・用法の詳細な分析を行う。その際、元々同起源であった名詞的小辞に、その後どのような機能上・用法上の差異が生じたのか、対照しながら明らかにする。

(5) 上記(4)と同様の手順で、動詞的小辞について、元々同起源であった動詞的小辞に、その後どのような機能上・用法上の差異が生じたのか、対照しながら明らかにする。

(6) 上記(4)、(5)と同様の手順で、一般的小辞について、元々同起源であった一般的小辞に、その後どのような機能上・用法上の差異が生じたのか、対照しながら明らかにする。

(7) 上記(4)、(5)、(6)の作業の成果をまとめ

て、名詞的小辞、動詞的小辞、一般的小辞の中で、ポリネシア諸語間で、元々同起源であったもので機能上・用法上の差異が見られるものについて、どのような小辞で差異が見られたか、また、どのような差異が見られたのか分析し、傾向をまとめる。その際、ポリネシア諸語における小辞の機能的・意味的な変遷のプロセスについても考察する。

4. 研究成果

(1) 名詞的小辞について、様々なポリネシア諸語のデータを見た結果、元々同起源であった前置詞について、言語間で機能的な差異が生じている事例が見られた。そこで、サモア語、タヒチ語、ハワイ語の実際の用例を用いて、どのような差異が見られるのか詳細に分析した。その結果を以下のようにまとめた。

前置詞の中でも、無格の前置詞'o と起点の前置詞 mai は三つ全ての言語で、名詞述語を導くことができ、その際には、時制/相指標は付加されないという点で一貫していた。しかしながら、その他の前置詞については、述語名詞句を形成できるか否か、更に、形成できる場合には時制/相指標の付加が必要か否か、という二つの点で多様性を示していた。

このようなことから、ポリネシア諸語の前置詞については、述語形成機能をもつ前置詞と述語形成機能を持たない前置詞の二種類を区別するのが適当と思われる。前者は、前置詞に述語形成機能があるため、<前置詞+名詞>の形で述語をなし、後者は、それ自体には述語形成機能がないため、述語形成機能をもつ時制/相指標を付加し<時制/相指標+前置詞+名詞>の形で述語を成す。

様々な前置詞を比較した結果、無格の前置詞'o と起点の前置詞 mai は、いずれの言語でも述語形成機能を持っており、一方で、行為者を表す前置詞 e はいずれの言語でも述語形成機能を持っていなかった。しかしながら、それ以外の前置詞について、言語間で、述語形成機能の有無について差異が生じていることが示された。

(2) 動詞的小辞について、様々なポリネシア諸語のデータを見た結果、元々同起源であった時制・相指標について、言語間で機能的な差異が生じている事例が見られた。特に、多様な機能を持つ動詞的小辞 e について、特に、従属節（非定形節）を導く用法において、機能・用法的な差異が顕著であったので、サモア語、タヒチ語、ハワイ語の実際の用例を用いて、どのような差異が見られるのか詳細に分析した。その結果を以下のようにまとめた。

動詞的小辞 e はいずれの言語においても、主節で用いる場合には、非過去/非完了/一般的事実のように、過去・完了と対立する意味

を表すという点では顕著な際は見られなかった。

従属節（非定形節）においては、主語の意思・願望を表す機能を担うという点においては共通であったが、主節にどのような動詞が来た場合に従属節を動詞的小辞 e が導くのか、という点において、差異が見られた。「~しに行く」、「~するように命じる」まではいずれの言語でも動詞的小辞 e が用いられたが、「~したい」、「~し始める」等では動詞的小辞 e を用いない言語もあった。三言語の中では、ハワイ語において、最も一般化されており、他の言語では名詞化を伴う表現を用いる場合でも、ハワイ語のみ動詞的小辞 e が導く従属節が用いられる場合が見られた。

(3) 一般的小辞について、様々なポリネシア諸語のデータを見た結果、元々同起源であった強調辞 fo'i/ho'i について、言語間で機能的な差異が生じている事例が見られたので、サモア語、タヒチ語、ハワイ語の実際の用例を用いて、どのような差異が見られるのか詳細に分析した。その結果を以下のようにまとめた。

いずれの言語でも、意味的には、ある事実を強調したり（「まさに、実に」）先行する文脈と同様の事例であることを強調したり（「~もまた」）するという点においては共通であったが、サモア語において、特殊な用例として、強調というよりもむしろ弱化的な機能があるという点で異なっていた。

文中のどのような位置で強調辞 fo'i/ho'i が用いられるのかという点については、言語間で差異が見られた。具体的には、述語句末（動詞述語・名詞述語に関わらず）と非述語名詞句末ではいずれの言語でも強調辞 fo'i/ho'i が現れたが、トピック名詞句末と限定詞（指示詞/所有限定詞/「他の」）と名詞の間の位置には現れない言語が見られた。

(4) 上記の(1)から(3)までの成果に基づき、元々同起源であった小辞について、言語間で機能的な差異が生じている事例について、整理分析し、どのような場合に差異が生じるのか、またそれはどのような差異であるのか、傾向性を探った。その結果を以下のようにまとめた。

元々同起源であった小辞について、言語間で機能的な差異が生じている事例には大きく二つの場合、すなわち、ある一つの小辞の意味や機能が元々の意味や機能から長い年を経て少しずつずれていった結果として言語間で差異が生まれたと考えられる場合と、複数の小辞の機能が一つの小辞の中に統合された結果として言語間で小辞の機能に差異が生じたと考えられる場合、との二つであ

る。

前者については、意味が変化した場合に加えて、機能的な変化、例えば、共起する単語に範囲の違い、文中での分布(どの位置で用いられるのか)が含まれる。

後者については、更に、文構造の中で同じ位置に起こる二つの小辞の機能が一つの小辞に統合する場合(多義的な小辞の発生)と、文中で隣接する異なる位置にくる二つの小辞の機能が一つの小辞に統合する場合(多機能的な小辞の発生)とに分けられる、ということがわかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

塩谷亨、サモア語、タヒチ語、ハワイ語における一般的小辞 fo'i / ho'i の分布について、室蘭工業大学紀要、第 66 号、査読有、2017、139-152

<http://hdl.handle.net/10258/00009166>

塩谷亨、サモア語、タヒチ語、ハワイ語の名詞的小辞の対照研究、室蘭工業大学紀要、第 64 号、査読有、2015、99-108、<http://hdl.handle.net/10258/3784>

[学会発表](計 6 件)

塩谷亨、サモア語、タヒチ語、ハワイ語における多機能小辞について、北海道言語研究会、2017 年 3 月 2 日、室蘭工業大学(北海道・室蘭市)

塩谷亨、サモア語、タヒチ語、ハワイ語における強調辞について、北海道言語研究会、2016 年 3 月 7 日、室蘭工業大学(北海道・室蘭市)

塩谷亨、ポリネシア諸語の一般的小辞について、北海道言語研究会、2015 年 12 月 04 日、室蘭工業大学(北海道・室蘭市)

塩谷亨、サモア語、タヒチ語、ハワイ語における非定形節を導く動詞的小辞の用法について、北海道言語研究会、2015 年 03 月 13 日、室蘭工業大学(北海道・室蘭市)

塩谷亨、ポリネシア諸語の動詞的小辞概観、北海道言語研究会、2014 年 09 月 26 日、室蘭工業大学(北海道・室蘭市)

塩谷亨、ポリネシア諸語の名詞的小辞について、北海道言語研究会、2014 年 03 月 11 日、室蘭工業大学(北海道・室蘭市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

塩谷 亨 (SHIONOYA, Toru)

室蘭工業大学・工学研究科・教授

研究者番号：10281867